比叡山シンポジウム

「現代社会における宗教の役割」

平成３０年４月２２日

心の時代

長尾　真

要旨：２１世紀は心の時代である。科学技術や生命科学の急速な発展にもかかわらず、人の心は満たされず、人類はますますいがみあう方向に行きつつある。これを宗教や科学技術がどのように受け止め、どうすればよいかについて考えることが期待されている。

１．　科学技術時代の特徴

① 科学技術の時代は全ての物事を客観的対象として要素還元的手法で取り扱ってきたが、その限界が明らかになってきている。そして２１世紀に入り分析の時代から合成、生成の時代に転換しつつある。つまり工学の時代である。

② 人間そのものも客観的対象とし、自己という主体、その存在の中心である主観、哲学的に言えば人間・自己の実存というものをますます軽んじた時代に入ってゆきつつあるように見受けられる。キルケゴールの叫びも現代人にはほとんど影響を与えていない。

③ 一方では人間存在、自我の独立性・自由というものが強調されすぎて、またその結果、人間の限りなき欲望に制御が効かない状況となり、グローバル資本主義、金融資本主義などが地球規模で発展することによって、自己中心的で弱肉強食の時代となっている。

④ 科学技術の世界では、原子をそれ以上に分解し膨大なエネルギーを引き出そうとしたこと、クローン生物を作ったり、遺伝子を操作してこれまで地球上になかった生物を作り始めたことは、神の意志に反する行為と言わずとも、パンドラの箱を開けてしまったわけで、人類そのものにとって大きな間違いであったのではないだろうか。地上には深刻な問題が山積しているにも関わらず、月や火星に人を送るということが当然のことのように受け取られているが、それでよいのだろうか。

２．　２１世紀は１９，２０世紀の作った負の遺産を償う時代

① 工学の時代に入って、野放図に作れるものは何でも作って良いわけではない。人類や地球にとって良くないものは作らないようにしなければならない。

② 地球環境の回復（動植物、空気、水など）への努力が要請されている

③ 地球資源の消費をできるだけ少なくし、限界費用を極小にする社会の実現が求められる。
④ 弱肉強食を防ぎ、相互協調的・平和的共存の推進への努力が求められている。
⑤ 飽くなき欲望による現代の資本主義社会の見直しが求められている。
⑥ ２０世紀の顕著な考え方である「進歩発展」という概念から「循環的定常（経済）社会」という概念への転換が求められている。
⑦ 金儲けが最重要な尺度になり、心というものが忘れられているが、道徳心が厚く、人間性が豊かで、思いやりのある人間社会を復活すべきであろう。
⑧ 要素還元的手法による理解でなく、全体を全体としてとらえることが必要な時代となっている。
⑨ こういった多くの課題を生成の時代に入った工学によって解決してゆくことができるだろうか。

３．　歴史的流れから見た時代精神の変遷

① 時代は「知・情・意」の精神の繰り返しとなって流れていると考えられる。例えば西洋文明は古代ギリシャ時代（知）、中世キリスト教時代（情）、ルネッサンスからフランス革命の時代（意）を経て、再び科学技術中心の１９，２０世紀という知の時代となってきた。
② 科学技術の発達とともに原子や生命の科学などの基本的原理が解明された結果、脳科学以外には根本的な未知の世界はなくなったといってよいだろう。知の時代の終わりが近づいているのではないか。
③ 時代精神の流れである知・情・意の繰り返しからして、２１世紀は情の時代、「心の時代」に移ってゆくだろう。現代文明の恩恵にこれ以上浴すよりは、心の不安を無くし、安心した生活を営みたいという気持ちが先進国を広く覆いつつある。宗教的なものの復活の兆しも現れてきている。

４．　科学と宗教の接点

① 宗教とは信仰の基礎となる教義を信じ、これを広めてゆこうとする人達とその組織と定義しても良いだろう。宗教心とは個人が心の中に教義を信じ、それに従って正しく生きることと言ってよい。
② 心は自分を含んだ全世界を内に抱え、それを認識する機能を持つ。したがって心の在り様を対象とする宗教は必然的に世界とは何かを相手にせざるを得なくなる。一神教においてはそれを世界は神が作り給うたものと考え、仏教においては心の正しい在り様を追究してゆくことによって邪念を

捨て、余計なものを退けてゆくことによって空の世界、あるいは無の世界に至ることを目指すものであろう。

③ 世界は言葉によって分節されている。あるいは人間の知覚能力によって分節されている。しかし、これは人の認知の仕方によって異なり、唯一のものではない。この分節、あるいは分節されたものの背後には意味の世界があり、そのさらに背後には無意識の世界がある。この世界の構造のさらに背後、あるいは構造の底といってもよいところに魂とでもいえる何ものかが存在し、これが生命の根源として、あるいは人間のエネルギーの根幹として存在する。人間の頭脳はこのような構造をしていて、その最深部は空あるいは無の世界と呼んで良いもので、すべてのことの出発点であり、ここから逆に無限の可能世界が生み出されることになる。別の言い方をすれば、この空の状態になれば分節された全世界を透視し理解することができるということであり、いわば悟りの境地であると言えるだろう。

④ 一方、科学は宇宙全体を物理学だけでなく、生命科学あるいは社会科学や心理学などによって要素還元的手法で説明しようと努力している。その現状はビッグバン宇宙のモデルに到着した。１３８億年少し前に一点から出発してビッグバンと呼ばれる急速な膨張を経て今日の宇宙となっているという説明である。

⑤ しかしビッグバンを起こす原点がどのようなものかは一切わかっていない。全宇宙の本質を時間を逆転して辿って行った時の窮極は今日の一切を生じる原点であり、上記した空の世界に対応すると考えてよいだろう。

⑥ 仏教における人の心の本質を探っていった時の窮極の状態と科学が辿って行った時の宇宙の始まりとはこのような形で一致すると言えなくもない。これはある意味、すべてのものの原点であり、それは全てのものを含む、あらゆる可能性の出発点であり、悟りに至った心の状態である。この境地は全てのものに対して自由であり、何事にも対処できる境地であるともいえる。ビッグバン宇宙も状況によっては別の世界を展開していたかもしれず、多くの可能性、自由度を持った宇宙モデルである。

⑦ 道元は過去の一切は現在の世界に現象していると言っているが、その現象の認識を無意識よりもさらに深くたどれば空あるいは無の世界に行き着く。これは科学における世界、宇宙の解釈が現在を観測することによって１３８億年前までを明らかにしているということと同じことを言っていると考えてもよい。

⑧ 科学と宗教はこのような形で窮極のところで同じ点に至るということであろう。

５．　人間の在り様について

① 人は迷う。これはどういう状態なのかといえば、判断ができない、決断ができないから行動に移せない、将来に希望が持てない、悩むといった状態である。これを解決する方法としては科学的に徹底的に原因究明して、その結果決断できるようにする。宗教の世界では教義を信じ、そこから導かれることに信を置き、心に将来の思いを描くことであろう。教義のない神道のような場合はどうか。上記の議論からすれば教義があるとは、空から歴史を経て教義があるところまで時間が進んできたということであり、教義がないとはそれより以前、空あるいは無の状態に近い状態にあることを意味していると言えよう。つまり空の境地に近い状態である。

② 人間は自己の生存を脅かされることや死に対する恐怖といった未知のものごとに対する恐怖とともに、飽くなき好奇心と欲望によって地球社会にとって問題となることをも配慮せずにやってしまう。これらは生物として避けられない本能であろうが、その結果が今日の科学技術社会の状況である。

③ 一方では太古の人達は未知のことや死への恐怖心から、こういったことを引き起こす何ものかの存在を考え、これを神とし、神を恐れ、神を敬うとともに、神を怒らせないという考え方から宗教というものを作ってきた。

④ 宗教的立場の人達、自然科学、特に心理学的な立場の人達の何れにおいても、究極的には死や未知の物事の内容を知ることによって好奇心を満たし、人間の悩みを解消し、安心立命の境地を実現したいと思っているわけで、このお互いの究極の目標が異なっているわけではないだろう。両者はたまたまこの究極の目標に至る道が異なっているだけであると言えなくもない。いわば富士山に登るルートが違ったり、徒歩か、車か、ヘリコプターによるかといった違いと言えるだろう。ただいずれの道をたどっても究極の境地に近づくことはできても完全に到達することはできないだろう。宗教における違いについても同じである。

６．　究極的なものへの科学技術的アプローチと宗教的アプローチの違い

① 未知のものの解明に関して、科学技術は「なぜ」という問いを発し、その答えを発見しようとする。たとえその答えを見つけたとしても、その答えは何故そうなのかという問いをさらに発するという分析の繰り返しを行う。この繰り返しは無限に続くもので、終わりがない。したがってどこかの段階でこの問いを諦めざるを得ず、そこでの内容を正しいも

のとして受け入れ、分析をそこで止めざるを得ない。

② いっぽう、宗教的立場は、そういった分析的な問いは発せず、未知のものごとの存在を直観的にそれとして是認ないし肯定し、その存在を信じる。「人は死ぬ」ということを、なぜ人は死ぬのかを問うても仕方のないことであり、それが真実だと信じるのである。人間にとっては迷いがなく、それでよいのである。

③ 科学技術と宗教の方法論にはこのように大きな違いがあると言える。科学技術は現代文明を作り上げ、人類に大きな貢献をしてきた。しかし無限に続く分析のどこかの段階で分析を中止し、それを正しいと仮定して受け入れることと、宗教における未知のものをそのまま受け入れることとはレベルに差があるとはいえ、人間にとっての科学技術という立場で考えれば、本質的には同じことであると言えよう。つまり科学的立場に立っても分析のある段階で最後は信じる（あるいは仮定する）ということを持ち込まざるを得ないのである。

7．　宗教間の違いについて

① 何千年も前には地球上のどの民族も自然の現象に神秘を感じ、これを恐れ、そこに不可知な力、神の存在を感じたに違いない。その後一神教になった民族においてもそれ以前は全て多神教であった。種々の自然現象に対してそれを引き起こす個別固有の神の存在を認める世界であった。ただそれぞれの民族が住み活動した土地、風土の違いによって民族の考え方が異なるのは自然の成り行きであり、神の在り方、性格が異なってくる。

② 古代エジプト、オリエント地域の自然は厳しく、狩猟を中心とする民族であり、狩猟と肉食の性格から個々の人間の独立性が高く、闘争的であるから、民族としての生存を保障するためには民族の団結が必須のことであったに違いない。それを具体的に実現するものとして一神教が生まれたと考えてよいのではないだろうか。つまり唯一神のお告げによって強力に人たちを律することによって民族の団結を維持する世界である。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はこうして生まれた。そして神の下での人間の在り方は強い性格を持つ個人と神との間での一種の契約であるという考え方に行き着いた。これは人間の存在というものの独立性を明確なものとし、そこから西洋社会が形成されていった。

③ インドから東の地域に行けば行くほど気候は穏やかになってゆき、民族の団結といった強い束縛が第一義的ではなくなり、人たちが緩い形で相互協力することが中心となる定着型の農耕社会が形成され、古くからの

多神教が温存されてきたと言えるだろう。ヒンズー教はその典型である。

④ インドで仏教が生まれたのは、釈迦が貧富や身分の差に関係なくすべての人間が苦しみを抱えていることに気づき、瞑想を通じて覚りを開き、その覚り、つまり解脱の状態を弟子に伝えるところから出発した。原始仏教と呼ばれているものである。釈迦はあくまでも人間であり、人間を律する神という概念は原始仏教には本来的にはない。人間の持つべき道徳とその実践であり、仏（つまり覚りを得た人）という概念が成立した。

⑤ これが時代を経て流布してゆくにつれて多くの宗派ができ、宇宙の働き、人間の在り様などについての哲学的論争に展開して行き、大乗仏教が形成され、中国を経て日本に伝えられた。仏教は広大な宇宙の中で人間の生き方を説き魂を救済しようとするものである。

⑥ 中国には儒教や道教があるが、これらは当時の為政者の国を治めるためのものであるとみなせる。庶民をうまく統治するために作られた一種の道徳を述べたものと考えてよいだろう。中国平原は古くからいろんな民族が周辺から入ってきて交代して支配した歴史を持ち、これを支える思想として儒教や道教が成立したのではないだろうか。

⑦ いずれにしても、宗教は死後の世界を中心とするというよりは、現在生きている自分の在り方を考えるためのものである。死後の世界のことはその中に含まれる。

８．　日本の宗教の特色

① 日本は台風や火山、地震など自然の脅威があるものの、他民族に侵されることなく来たわけで、穏やかな農耕社会が続いてきた。人々は協調的で平和的に生きてきたから、自然の脅威を恐れ、これを鎮めること、また稲作などの農業が豊作になることを祈り、先祖を慰め敬い、罰が当たらないようにすることなどを中心とする多神教のままであり、宗教的に思想を深化させる必要はそれほどなかったと言えよう。ただ多神教とはいえ、歴史時代に入って神々は天照大神のもとに系譜的に統一されたため、神々の区別はあまり意識されなくなった。

② 他民族、他宗教との出会いが飛鳥時代までなかったためもあって、神とは何ぞやといった、ことさら他と比較対照、区別する必要がなかったことから、神に関する教義といったものはない。神を崇め、自分の心を清らかにし、人間として正しい生き方をするということを神の前で自分に言い聞かせるだけで十分なのであった。それ以上何の理屈も必要としないというのが神道であると言えよう。それで充分なのであって、神すなわち自然に対する信仰、自然との共生を大切にし、人間として持つべき

道徳心などを大切にしているのである。

③ 仏教の渡来によって宗教というものに目覚め、死後は浄土に行くことを望み、それで安心立命するようになった。さらに鎌倉仏教になるにしたがって真剣に庶民の救済、つまり死後の世界が関心の的になり、仏の救済にすがるという考え方がはっきりしてきた。法然、親鸞の宗教である。しかしその次の一遍に至って、理屈を超えて一心に南無阿弥陀仏を唱えれば浄土に迎えられるという世界になった。これは神道における心を空にして拝む、それ以上何も求めないという日本古来の神道的宗教心に通底するものと考えられる。こうして仏教の教義を学び深めてゆく方向が民衆の間にはほとんどなくなってしまった。

④ 宗教教義の議論をいかに深めても、人間が安心立命し、救われるかどうか分からないから、見方によればこういった日本人の単純な神の考え方もありうるといえるのではないだろうか。世界に通用するかどうかは別にして、Simple is best.の世界である。

９．　個人にとっての宗教、あるいは宗教的考え方の在り方について

① 宗教はそもそも未知なもの、不可知なものに対する恐れから発生した。ところが今日未知なもの不可知なものは科学の最先端の問題にはあっても、一般の人たちの世界にはほとんどない。昔の人達は３０代、４０代で亡くなっていたから、その年代の人は死への恐怖が強かっただろうが、今日のように８０歳代の人達になると死への恐怖はあっても、これは心理療法などによって、本当に死に直面している人たちのほかには、それほど深刻な課題では無くなっている。知識の問題ではあっても心の問題ではないという状況である。

② たとえ心の問題であっても心理学によって解決しようという時代となってしまっている。例えば、心の不安から宗教にすがるというよりは、今日では心のケアを重視した施設で過ごす人が増えている。

③ 死に関心はあっても死後の世界に関心はないということもあって、今日では宗教によって救われると考える人たちは、少なくとも日本においては、非常に少なくなってきて、宗教への関心は衰えてきて、宗教が衰退するのはやむを得ない状況となっている。

④ 我々はこのような時代認識をはっきりと持つべきだろう。このような社会的状況に対して宗教や科学は何ができるかを真剣に考えることが必要であろうが、さらに従来の宗教概念、人の心の救済という考え方から、上記のような現代の状況を直視して科学や心理学などによってはどうしても救えないものは何かについて原点に帰って深く考え、方向転換を

大胆に行う必要があるのではないだろうか。

⑤ 今日では個人の権利意識が高まってきており、恐怖心から宗教にすがるというよりは、人間として正しい行いをするために宗教的実践を重んじるという自力の方向があるだろう。また死の哲学ではなく、より良い生へ向けた哲学、個人が充実した人生を送り切った満足感を持ってあの世に行くことのできる社会を作ってゆくにはどうしたらよいかという人文社会学や心理学に力を入れること、病苦を味わなくて済むための医学、そして何よりもそういったことを実現するために必要な強靭な精神、道徳心、忍耐心の養成という方向がありうる。しかし、他力本願で宗教にすがらずに最後までやれるものかどうかという疑念も生じる。少なくとも宗教心だけでも持ってもらいたいものである。

１０．社会や民族・国家と宗教

① 個人と宗教の問題のほかに、非常に深刻な問題は社会や民族・国家と宗教の関係であろう。今日政教分離という考え方が一般であるが、そうでない世界も存在する。どちらが良いかということは簡単ではない。今日では宗教同士が敵対することは考えられないが、イデオロギーとして宗教を掲げる集団同士が敵対するということはあちこちで起こっている。

② 現代社会における人々の恐怖は貧富の差の拡大によって底辺に落ちてしまうことへの恐怖、明日への希望のなさ、生きる目的を持たない空虚で孤独な存在、民族間の狂気に満ちたいがみあいなどに対する恐怖といったことではないだろうか。社会生活に対する不安感が広がっている。

③ 異なった宗教を掲げる集団同士がいがみあうことを避けるために多くは政治的努力に依存しなければならないが、それだけでは全く不十分であり、結局はそういった集団を構成する個人のものの考え方を変えてゆくことが必要である。寛容の精神まで行かなくても、せめて妥協するという心がけは必要である。

④ 民族間、個人間の相互理解を促進するためには相手のものの考え方や立場、歴史や置かれた環境などをよく知ることが前提になる。そのうえで十分な相互交流と対話ができるような環境の整備が必須であろう。

⑤ そういったことに対しては情報の科学技術が大いに貢献することができる。今日では情報通信ネットワークが発達し、どこにいてもテレビで世界各国の人達の生活を見ることができるし、ものの考え方、主張、犯罪や紛争、政治などの状況も知ることができる。また多言語間の機械翻訳システムが出来つつあり、これを用いて異なる民族間の意見交換が自由にできるようになれば相互理解が深まることになる。このような状況

は今後ますます盛んになるだろうし、人々は地球上あちこちに自由に行けるようになるだろうから、相互理解や相手に対する寛容の精神が醸し出されてゆくだろう。

⑥ それにしても過度の自己主張や欲望を自己規制する個人の努力がなければ相互理解といったことはありえない。そのためにも例えば座禅、あるいは米国で最近開発され広まりつつあるマインドフルネス（米国流座禅）の実践といった個人の努力が求められる。こうして多様な文化的背景を持ちながら国際的に交流できる、いわば世界人を一人でも多く育ててゆくことが求められているのではないだろうか。

１１．信念について

① 信念とは何かについては種々の定義が存在する。ここでの定義は、信念とはそれが否定されれば自分の存在そのものが全否定されたと感じる何ものかである。したがってこの事態はその人にとって非常に深刻なものであり、何らかの方法で自分の名誉を回復しようとする。

② そこには３つの道があるだろう。その第一は相手にこちらの立場、考え方を認めさせる、第二はそれがかなわないときに、お互いの立場が並行したある種の膠着状態が生じる。第三は相手に負け、自分の信念を放棄するか、信念を相手のものに変える、という三つである。この第三の場合は第一の場合の逆に近い場合である。第一の場合を貫こうとするとき、相手を説得できないと武力をもって屈服させるということがしばしばおこる。これは動物の本能として避けがたいことであるが、知能と情感を持ち合わせ、隣人愛を持つ人間世界においてはあってはならないことであろう。

③ せめて第二の場合、すなわち並行状態、対立状態が持続することであろうが、その際も両者は徹底的に議論を持続するべきであろう。その結果それぞれの立場をアウフヘーベンして両者が一段高い状態に至って妥協できれば言うことはない。それが実現できなくても、せめてお互いに相手の立場に干渉しないということでなければならない。

④ 宗教は信念によって支えられているわけで、宗教間の対立がもしあるとしても、それは相互干渉のない状態でありたいものである。

⑤ そのためには寛容な心とまでは言わずとも、少なくとも相手の立場を容認する忍耐心を持つべきであろう。

⑥ 両者が徹底的な議論を尽くして現在よりも一段高い世界に妥協点を見出して、お互いにそこに向かって協力できるようになることが望まれる。５の④に述べた世界への努力である。

１２.「心の時代」に向けて

① 人間にとって未知なこと、解決困難なことは山積している。また個人や集団の持つ欲望を制御することは難しい。だからこそ全ての民族、国家、個人がこの問題をどうすべきかについて共通認識が持てるようにする活動が大切である。

② ゲーテの言葉:「思索する人間の最高の幸福は、探求できるものを探究し尽くし、探究しがたいものを静かに敬うことである」という言葉をよく噛み締め、各宗教が大切にしている愛や慈悲に基づく欲望の自己制御の概念を共通の軸として相互に話し合う場を設けることが必要である。

③ 宗教間には教義や物の考え方に違いがあり、簡単には相互理解をすることは難しい。しかしいずれの宗教も世界宗教である以上、隣人を許す、隣人を愛すべしという寛容の精神が明確に教典に書かれているし、救済の概念があるのだから、些細なことでの違いを乗り越えて、これを相互の共通概念、宗教相互間の理解の共通基盤とすることができねばならない。

④ これから発展してゆくであろう認知科学、脳情報学によって共感のメカニズム、相互理解に至る脳の働きや心の解明が行われるだろうし、慈悲の心、利他の心が瞑想や祈りと深く関係していることもわかってきている。人間の持つ欲望の自己規制と道徳心の発露に関する心理学も発展するに違いない。こうして宗教世界の共通基盤を科学的論理からも肯定し協調してゆくことができるだろう。こうして、宗教的実践と心理学、脳科学の協力によって積極的に「心の時代」を先導してゆくことが望まれる。

⑤ 「心の時代」の到来に際してこのようなことを議論の基盤に据え、宗教家のほかに自然科学者、心理学者、脳科学者、人間学者などを入れた世界宗教会議を開催し、その成果を積極的に世界に発信することが望まれる。ただこのような活動も簡単に目的を達成することは難しいから、まずは、できるだけ少人数で深く徹底的な議論の積み重ねを粘り強く何度も繰り返す必要があろう。お互いがせめて対話のテーブルに着くことが必要である。

⑥ 科学技術の時代を越えて世界の種々の民族、社会における人たちに共通に存在する心というものに光を当てて,共通理解を実現する努力をすることの大切さを明らかにし、社会に示すことが求められている。

以上